

訂刊筆中報全

狂歌評判記

利
3.0/0
/



春社言ハ賞蛙
当座の出類



かこまらつて

作者判者の
對面三塵

きのよ花をえつは柱

新樹よ其の

まをいきて

がんまを

田文歌

つぎまこ まやうり ぐらゐ
てる月並の狂言會

うち
内さま格かぢ子こ

たさきたさき乾くげハ

てうどてうど菴あま中ちゆうの

十又じゅうまた貞

ねんぢう

連中れんぢうのめほえせ

書かぬぬままいい

雪ゆきの名な家か

おのおのうういいゆゆ

ホ毎ほまいの花はな及およ

○禪人の書後炮打尚しんにんの狂言きやうげんの山

澆しやう率そつ法ぽうとてとてゆるゆるるる昔むかしよりより今いまもも世よの中ちゆう

とといいふふ世よのの發はつ明めい古こきき塔たつりり別べつてて連れん年ねんののままりり

和わぶぶせせ格かく漏ろうののりりのの帶たいももげげんんののたたいいのの

とといいふふののりりへへ入いるる皆みな公こうにに書かききてて悲かなししいいととまま

ああののななままのの法ぽう徳とくををななめめるるもも皆みな公こうにに書かききてて平へい海かいにに

おおののぶぶららああぶぶーーままははははははのの祭まつりれれまま店たなととすすりり

付つききののりりととわわららせせとといいふふ常じょう生せい母ぼのの京きやうののままりり町まちをを

後ご者しやのの抱だ抱だ由ゆ緒じゆ之之率そつとと格かく方ぽう口くち跡あとととああいい敬けい

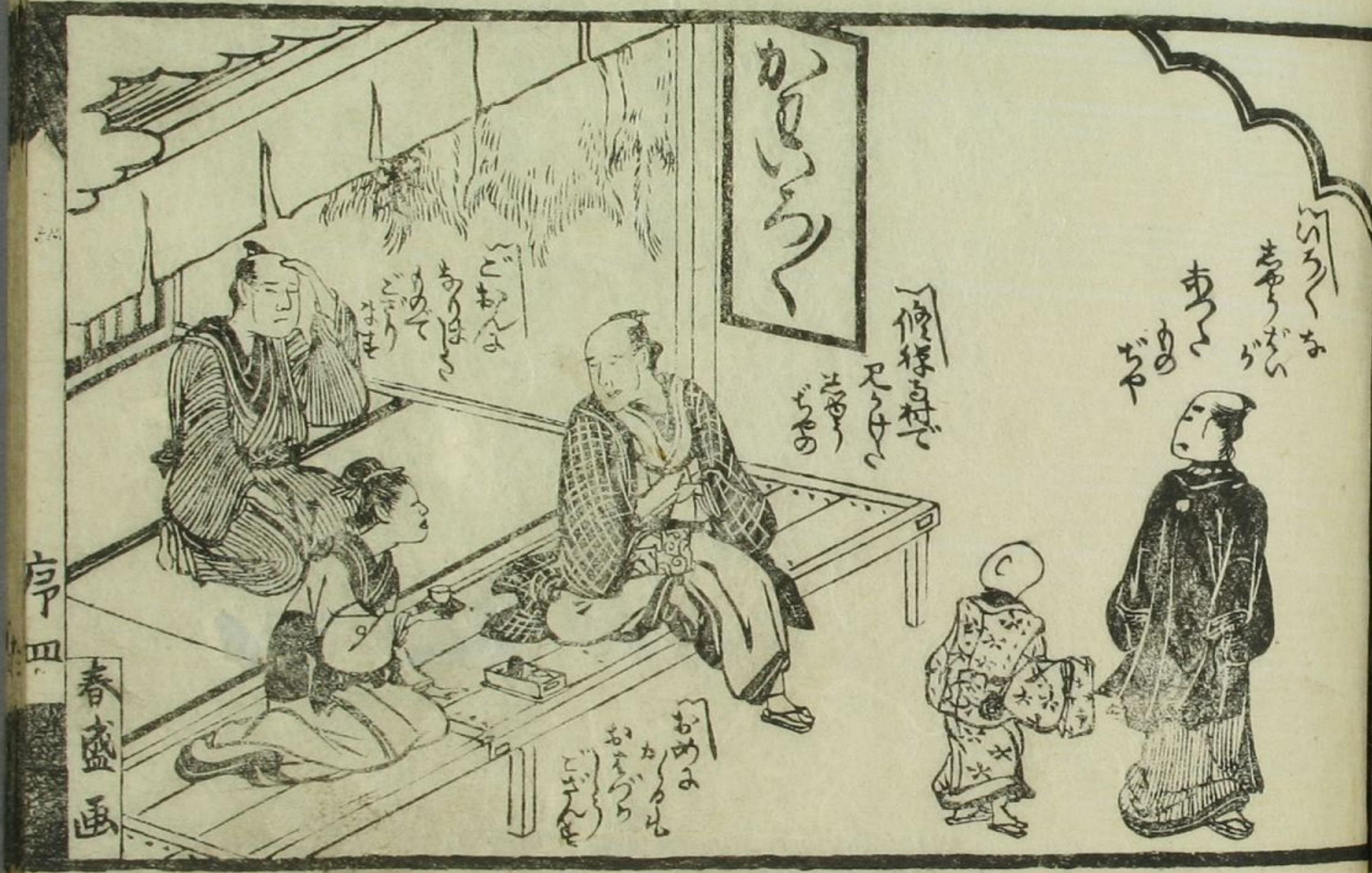
ももああれれとといいふふののりりのの判はん別べつををいいふふははららががよよかららとと

法ぽうははいいでで下くだしてしてとといいふふ判はん別べつがが出でててままははららとといいふふ

づづららいいででいいふふららとといいふふ高たかののままののいいはは我われららがが

巻まきのの東とうののままををままてて洗せん子し用よう別べつ又またいいははららのの後ご

杖しやう若じやく我われららがが十じゆ高たか後ごをを風かぜのの吹ふかかつつてて



亭四
 春盛函



2024年11月1日 晴

1. 昨日の午後、友人と散歩した。秋の気配が感じられる。

2. 今朝は朝露が降り、涼しい。

3. 仕事は順調に進んでいる。

4. 週末は家族と旅行に行く予定。

5. 明日は晴れると予想されている。

6. 健康は良好で、元気です。

7. 感謝の気持ちを込めて、日記を書き残す。

8. 明日はまた新しい一日が始まる。

9. 生活は忙しすぎず、静かすぎる。

10. 未来への希望を胸に、前を向いて進む。

11. 昨日の夜、夢を見た。

12. 夢の中で、大切な人に出会った。

13. 夢の内容は、とても感動的だった。

14. 夢を覚めた後、しばらく涙が止まらなかった。

15. 夢は、心の奥底にある思いを映し出す。

16. 夢を通じて、自分自身と向き合おう。

17. 夢は、人生の指針となることもある。

18. 夢を糧として、前を歩こう。

19. 夢は、希望の光を照らす。

20. 夢を叶えるために、努力を怠らぬ。

合子のまもりあつて救生を求めせんとあど
 おのて是の内も大層ありかゝるおまがら
 が極悪な事も思つてまて懸命で出うけ上野から
 浅草の初乃皮の志あぐおまあふ家あがた
 一枚とまかりてけかまきうのとままはらあつと
 置てもお母伊豆までと極ありと和歌を
 見て赤面せきめんうらつくさるよし新商賣といかきも
 かけてゆりぞこあんなうらとてかま入
 ちやが知つて女中あらちとまあつと勝と
 かまぶる程お伊豆の山中まぬ世の
 下りよしあまもあまもS極とS極のあ
 の合つたあまのS極のあまのあ
 ありといふかまのあまのあ
 のまのあまのあまのあまのあまのあ
 あまのあまのあまのあまのあまのあ
 いてあるあまのあまのあまのあまのあ
 ひいあまのあまのあまのあまのあまのあ
 まつてあまのあまのあまのあまのあまのあ
 ままのあまのあまのあまのあまのあまのあ
 くん宿人のまらうアハのまらうあまのあ
 物とあまのあまのあまのあまのあまのあ
 のりあまのあまのあまのあまのあまのあ
 大英ひ女房のあまのあまのあまのあまのあ
 指であるあまのあまのあまのあまのあ
 まあまのあまのあまのあまのあまのあ
 男あまのあまのあまのあまのあまのあ
 大あまのあまのあまのあまのあまのあ
 弾あまのあまのあまのあまのあまのあ
 馬あまのあまのあまのあまのあまのあ

の録をききくはつててかく狂歌
評判のそまろく

作者 故 藤つ、東他

叶文古人東他方人の手澤をて六樹園子
ひあつてまゝをとりまゝにひくひの序とん
あつ

文化五年

くろし

汗指園

青陽

東西南北

江戸通油町南側

耕書堂 葛屋重三郎梓

六樹園判

職人盡狂歌合

画入

辰ノ正月の書出

六樹園宿屋飯盛先生判
四季多難の狂歌救世者目録

▲春之部

極上上吉

狂蝶子文麿

戸

大上上吉

星井舍格繁

三前

上上吉

山水舍里迫

戸

上上吉

郷時雨菴空言

猿

上上吉

玉鉾軒行就

戸

上上吉

文々舍蟹子丸

口

上上吉

一松亭浦波

口

上上吉

便波亭濱瀾

口

上上吉

錦亭菘道

口

上上吉

鵬常也

三前

上上吉 上書叶主 戶

上上吉 泉元清 戶

上上吉 九万希鹏九 戶

上上吉 盡語樓内匝 戶

上上吉 玉光舍占正 戶

上上吉 垣元蒂九 戶

上上吉 一寸法作 戶

上上吉 吾披樓文數 戶

上上吉 泉月菴唱業 戶

上上吉 一得無裡成 戶

上上吉 鯛 魚 依 戶

上上吉 千雀菴餐竟 戶

上上吉 三保雪好 戶

上上吉 工文堂成兼 戶

上上吉 牛太樓 戶

上上吉 式定 門 戶

上上吉 興水亭花橋 戶

上上吉 水面亭智居 戶

上上吉 七葉亭樞九 戶

上上吉 千金九主 戶

上上吉 竹馬友乘 戶

上上吉 喜多扇九 戶

上上吉 眾中乃九 戶

上上吉 龍吟亭食岐 戶

上上吉 真得勇人 戶

上上吉 葉了刈多記 戶

上上吉 銚子亭久波倍 戶

上上吉 桂亭町了住 戶

上上吉 仙會會露村 戶

上上吉 廣亭道 一上上吉 小蝶春影

一上上吉 古亭山家 一上上吉 九面堂長良
一上上吉 各岨道 一上上吉 羅生堂鬼首
一上上吉 柏古枝 一上上吉 忠孝二道
一上上吉 蕪名山人

一上上 旭舊亭森住 一上上 經波堂方年

一上上 松壽園有久 一上上 切松覺

一上上 盞水亭西好 一上上 園夜亭利星

一上上 花実園鈴成

一上上 滝系百川 一上上 方山亭水成

一上上 双紙里主 一上上 宇和室成

一上上 玉花窓文吹

一上 南海堂晴保 一上 浦家佐安

一上 偶中舎粒多 一上 巨栗菴胤人
一上 曲筆山代住 一上 秋榮堂権丸

至上上吉 分草菴胡風 下地

一其之部

大上上吉 漱亀坊 破算

上上吉 阡陌園南北 江戸

上上吉 奇南樓香保留 江戸

上上吉 蘭糸亭和款留 江戸

上上吉 便早記 江戸

上上吉 石川清澄 江戸

上上吉 山田早苗 江戸

上上吉 花信亭鐘起 江戸

上上吉 赤葉注連三春 江戸

一上上吉 沢邊渡丸 一上上吉 奇松亭浦雀

一上上吉 醉亀亭廣丸

一上上 貢石高高一上上 陽冬亭小の丸

一上上 八重土房 一上上 陰忍舎三空也
一上上 柏方伴 一上上 烟葉亭机栗

一上上 村崎保人一上上 有學亭琴成
一上 宝千代積

上上吉 其仲頼 戶

秋之部

至上上吉 東任丈夫光俊 戶

上上吉 任文亭一通 戶

上上吉 月花菴雪丸 戶

上上吉 茗花屋為俊 戶

上上吉 美雲樓年久 戶

上上吉 柳水舍和發住 戶

上上吉 桂家風 戶

上上吉 淺水菴長記 戶

上上吉 家變丸 戶

上上吉 叶道鶴時 戶

上上吉 丁々亭多都岐 戶

上上吉 山々春風 戶

上上吉 喜雀園琢磨 戶

上上吉 糸持屋軸成 戶

上上吉 律巴河計夷 岐

上上吉 橘宮亭長綱 戶

上上吉 花山連 戶

上上吉 槇花亭金丸 戶

上上吉 十分舍阿丸 戶

上上吉 古今和可丸 戶

上上吉 以文堂為貞 戶

上上吉 龜玉堂雀包 戶

上上吉 海道通道道 戶

上上吉 望月約丸 戶

上上吉 黃金長丸 戶

上上士	六生園掃雪行	戶
上上士	醉水亭繩人	口
上上士	便面系常持	口
上上士	豐橋元親	口
上上士	東森邊	下弦
上上士	一軒舍門磨	口
上上士	清水竹生	口
上上士	一角舎巳丸	一上上士
上上士	永樂亭鍾浦	口
上上士	各々々々	一上上士
上上士	酒草菴	一上上士
上上士	他來盛具	一上上士
上上士	中啓舎萌	口
上上士	各茂苗	一上上士
上上士	冠候人	口
上上士	千葉亭松系	一上上士
上上士	紀為重	口
上上士	芝浦人	口
上上士	橋実能苗	口
上上士	尋幽亭	戶

▲冬之部

大上吉	三番里草人	戶
至上吉	紙屋川澄	口
上上吉	東夷菴古渡	口
上上吉	浅波菴河鳥	下弦
上上吉	便々舎炭方	口
上上吉	坂下任	口
上上吉	浅治楼見分	口
上上吉	便柳舎雪解	口
上上吉	桃花堂陽々	口
上上吉	了金亭多丸	口
上上吉	神葵堂煮人	口
上上吉	大田水成	口

上上吉	東壁堂古多	尾所
上上吉	便之館湖鯉	尾所
上上吉	浅花菴皮人	三列
上上吉	浅春菴安良	尾所
上上吉	大矢員久	成草
上上吉	雲暗安	尾所
上上吉	尋遊舎友人	尾所
上上吉	酒翁人	尾所
上上吉	碯音成	尾所
上上吉	喜楽舎和孝	尾所
上上吉	丸の七湖月	尾所
上上吉	柳原向	尾所
上上吉	卯お亭爽雪	尾所
上上吉	春風亭先弱柳	尾所
上上吉	田中舎芥磨	尾所
上上吉	甲路亭北住	尾所
上上吉	柏若翁	尾所
上上吉	秋氏男報	尾所

上上士	宝洲亭	尾所
上上士	唐羊表高	尾所
上上士	千歳堂核成	下段

上上士	玉象亭	一上上	仙弄亭基方
上上士	鄙細返	一上上	系瓜成和成
上上士	市教堂	一上上	重九
上上士	以尊亭香野	一上上	
上上士	緑毛亭美積	一上上	志根言益
上上士	五福亭條丸	一上上	月のや端丸
上上士	板屋亭常	一上上	雀直経千間
上上士	松浦風	一上上	曲水舎底清
上上士	連城亭毛丸	一上上	序溪堂年永
上上士	琴のや池久	一上上	

大上上吉 春江亭梅丸 尾所

▲雜々部

上上吉	佩詩堂耳風	尾所
上上吉	福無意門	尾所

上上吉 便々堂仲澄
 上上吉 榎引亭嘉任
 上上吉 通例舎安成
 上上吉 明心舎竹細
 上上吉 紀上宿成
 上上吉 遠近堂峯高
 上上吉 玉声亭形言
 上上吉 醉美園志らふ
 上上吉 傳蓋亭裡松
 上上吉 左右堂文武
 上上吉 後美雪堂衣手豊
 上上吉 清水汲方
 上上吉 七種菴喜芳
 上上吉 奇楠亭千枝
 上上吉 便草菴福也

以上

▲春之部

極上上吉 狂蝶子文齋

名不赫 遺風のかりりお舟とあてたり
 己にくえの事一巻波津社うめ

記 雁神帝の條云百海国をおおせて

賢人あつたをきてののかが今をきてまはる人
 の名和逆吉席 ひき 古今の序の注よりて蘇向を
 とくま一途洞とてあくとまににといふ文子の
 秀句あつたあての人の及びあつたをみまらんぬ
 のの平てひつたまあせし まぐ ころ ら ま ま ま
 不てまあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
 ままの夜あつたあつたあつたあつたあつたあ ひき
 此れが古事記を引いてのつてのつてのつてのつての
 まのつてのつてのつてのつてのつてのつてのつての

きりまはざき

上上吉

一松亭浦波

沙千

ちんちんもさるせまきさう産目ら
のりをとらみーぶ川の沖

既見花車がこのまゝあてお川の沖へ出雀

目をひらひてこころを流るをよきよふあきて

思ひ物も年々志らうお切者がふんまきく

さざせつこ下知せし世に初あはまゆめとらふ

あつてあうま家のよのめむじくあつてあうま

上上吉

便波亭濱綱

乃丁

種もさる稗もさるて井戸つら
ひとこつてよあかりうま

既見飯の二布中井ののこままあつて

あつてあうま家のよのめむじくあつてあうま

あつてあうま家のよのめむじくあつてあうま

づのあつてもよきまてあつてあうま

上上吉

錦亭秋道

雑

あつてあうま十二ひんりのあつてあうま
まじうとらみーぶ川の沖

既見大名類古今雑書権輿子大宮人乃

うらあつてあうま家のよのめむじくあつてあうま

あつてあうま家のよのめむじくあつてあうま

あつてあうま家のよのめむじくあつてあうま

あつてあうま家のよのめむじくあつてあうま

既見秋月のいこころまき東のまあつてあうま

あつてあうま家のよのめむじくあつてあうま

あつてあうま家のよのめむじくあつてあうま

三列

上上吉

臈常也

栴

あつてあうま家のよのめむじくあつてあうま



五
 評判筆東報

源五 文名先のそりよつくとく流をがつらね
る身ふあふぬ肉の枯るえらひきぬふちひの
袖はつらふちぬふらふけらむすくく春かた
のまきせく

上上吉

上書け主

子春 一鳴くそそふり信一暮くせそ

くまめくくのりつるるめく

源五 春の野をたゆんであそぶのおひ出るを
てて詩の終風の扇を打ておのつてらふ則すま
ひるよせのふちまきくく雷まどりのあも
おとこざるそくまやのたま言詩よくて除
きく

上毛

上上吉

泉元清

妙 一閑白く梅うえのこりまらうとの
こりまらうとのこりまらうとの

源五 山里の閑居の休めて南校花をためて年々
と誰かての出あてんつてあまき客人の花見
よまふをまきくくくくくくく南を
皆見かけのあまき 源五 ひくくくを
まきくくくくくくくくくくくく
梅のちりの言ひ極向とてまきく

奥引

上上吉

九万無鵬丸

常 山里のこのんの雪子胡ふ丸の
きく吹まきくぬ 源五 のころる

源五 山里の余寒まのこのんの雪のふりまき
春めくぬすくぬを雪のまよとくあま 源五 田の
心ぞおよめとかぬせりまきく

上上吉

盡語楼内匠

花 一春をむじとらひくくくくく田川
くくくくくを信よあつりて

既云 今つごあて救恒さまのやぶつての生大形
成持と枝をいへてく木を又容やう生山名の花
をとり半てあがさるいふとらういふにまぎとの
狂言ふまのよしまちあはまはせいふいふまの
実がらとさるいふいへ

上上吉 玉光舎占正

帰一丁 画作もあまきま八景を
ひとうかかせてぬる丁うね

既云 巨智の金剛まで八景を生うつてせう
ふよきうう春丁のとせよかふるをえてか田
の園のかまえうきまいて田と園とを秀向子
とのちたはしお上あのみまんとてまま

上上吉 垣元帯丸

三三三言 ぬぐりうのやあひのくまのくかそあ
おはらまあふ桃のさうさ

既云 清土の五帝のがび下らまもすく曲あの中
宜か後縁の音まて清溝のながめさうはと流れす
桃の盆とあはは下まの海のり ひま おあぐま
頂ごさるいふあがさるいふおあなまうら
あいつちあ

上上吉 一寸法師

少千 懸とり海う少千まかひひらふ
子みさくありのつうでさる

既云 初め文なわあは花知さるいふははつ
まごもごまははなをさるいふ Senta Senta
あゆのさるいふあさるいふ Senta Senta

上上吉 音振棒文教

早春栞 したわちの見やみつの朝よま
白ひをかがう栞の下のい

既云 元白栞のあつてを回て白ひをかがう
目をひけてまごいしたわちの法原あふくと具を

上上吉

三保雪好

「雪好くして雪入して雪くまれの
あつらひ舞への花のこころ」
[原] 花のこころを春のうたがさすれば節をきひ
知るる花のこころをさふらへては花のこころ
をきひては花のこころをきひては花のこころ
見物ごとくは花のこころ

上上吉

工夫雪成兼

沙干 「社会と沙干まひりひつり
目いりのちをさるひこころ」
[原] ひろくちの河あつらへては花のこころ
とまひり雪成兼のまひり雪成兼印本
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ

上上吉

牛太楼

花 「短冊のあつらへては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ

上上吉

式定因

花 「花をつく法師も春の日をさる
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ

上上吉

曲水亭花橋

元日 「元日まきまきあつらへては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ
あつらへては花のこころをきひては花のこころ

のり豆花成改

春のさきとて春のさき後とありてあやふきとていげ
千両の錦合とありてあやふきとていげ
み文やうらとありてあやふきとていげ
の白やえおれけとありてあやふきとていげ
らとありていげ

上上吉

水面亭智居

梅

春のさきとてあやふきとていげ
火とありていげ

花のさきとてあやふきとていげ
さきとありていげ

上上吉

七葉亭槐丸

梅

春のさきとてあやふきとていげ
あやふきとありていげ

花のさきとてあやふきとていげ
トヒヨのさきとありていげ

まゝのさきとありていげ

八王子

上上士

千金丸全

梅

春のさきとありてあやふきとありていげ
うめのさきとありていげ

上上士

竹馬友喜

梅

春のさきとありてあやふきとありていげ
さきとありていげ

上上士

喜多庵丸

花

春のさきとありてあやふきとありていげ
うちのさきとありていげ

花のさきとありてあやふきとありていげ
花のさきとありてあやふきとありていげ

花のさきとありてあやふきとありていげ
花のさきとありてあやふきとありていげ

上上士

鼠中万丸

万葉

春のさきとありてあやふきとありていげ
あとのさきとありていげ

上上士

竜吟亭久良岐

春月

春のさきとありてあやふきとありていげ
あとのさきとありていげ

大上吉

伎身

敝龜坊

甚夜 黄じもの七布も三布もよそはて

あいのたよりしてしあるまの東

既九 孫逸二種物種子ト其おがんの後までねよ

とのねよまごの故事をひきて横みあるあり

たのひまかろまじみ後まことあらざらうみあり

中茶ばくりあてこつげらうねまをかえまはら

ての口おうらあいの茶もまがごのまおしお寄

七布もあぶらねんのひもまきさうとらぶらあま

ぶらぶらひの茶種のおいんくまのひまねん

坊めあまをわぶらぶらあまのひまねんひら

子茶ぶらうらぶらあまねんまをたげあまの

あまのまをうらぶらあまねんまをたげあまの

せうぞうの者あまのまのひまねんまのまのま

あまのまもあまのまのまのまのまのまのま

広まんぞうてごまらう

汗百園

上上吉 東西南北

泉 海まむまき系とやんものた根より

既九 ひもの佐七のまらうかまはあまの紀

母まと名ののてあまのまのまのまのまのま

既九 おいて一杯のてんせまのまのまのまのま

あまのまのまのまのまのまのまのまのま

のうまのまのまのまのまのまのまのま

上上吉 奇南棒香留

初山 腹あまのまのまのまのまのまのま

既九 かしきの仕あまのまのまのまのまのま

だんまの上まのまのまのまのまのまのま

まのまのまのまのまのまのまのまのま

のまのまのまのまのまのまのまのまのま

上上吉

蘭絲亭和歌笛

浦野々「相あめまつひまゝあゝ保の浦
天子りつたるもこちとくまき

「あまのをとあまあゝぬおちとくまき
おとさるるを天は信あゝつゝねまき

上上吉

便早記

夏様「旅衣ひのねもあつて、まなひしり
むとふははあつたのりしとてはあゝ

「旅衣むまふはあゝと一口通るるは初立字
よつひらねとらけは世をどおの者

上上吉

石川清澄

納涼「夕風のやとりのととあふまき
我もそせいりのらちこそまき

「あつまきまきにて本はあふらふまき
風の吹まきよまきあつたのまき風のあつち
とまきまきのそせい法解とらちまきよ

上上吉

山田早苗

郭「あつたのあつたはあゝあゝまき
あつたあつたのあつたのあつた

「あつたのあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

上上士

花信亭鐘起

早苗「あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

上上士

お幕注連春

「あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

「あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

上上吉

其仲頼

餘花「曾般もあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

「あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

思ひつゝ各ののこし生るる樹とすまはるる
曾根うまきまゝあんと懸るるおち一葉にほ
とちきせつひはくしんかの切落もまゝかんせん
しんぞおとせ

▲ 秋う邪

至上上吉

東任夫先後

奥列

たかつゝ衣のそち種かかさんやましくし
り紙ひくくを星のふむ向ふ

秋任言もそちまのこころのてを乃葉
をかくつてのえまづ秋向ふげはるまきと相二星ま
秋をかんて種まきぬまきまゝんとして川をえ
ひを穿て天の川のあまのかけまきまゝあつとい
敷向の計のやどかどもまのまのあつとい
大てがら

上上吉

任文亭一通

積たきり川あつこのれさきりなまきし
あさけうり星のあふせを

積人まて七のまをまごやまをうて星のあを
を積まらへてあげかゝる初者あまのりふ文書の
あつとまきうて何のあつとあつとあつとあつと
かすおのあつとあつとあつとあつと

尾列

上上吉

月花菴雪丸

おる江ま林万の酒まきしこのえのえの
あつとあつとあつとあつとあつとあつと

月花菴雪丸
楽天のあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

尾列

上上吉

菅の屋為俊

菅の屋まきし種領のあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

昔のうきなれど下ありきてうらとて人いふれ
くも実子秀逸のむねでござる。[老入] 孤城蘭菊業
とのよ詩もどおのせらねて入奥のこころとて。[公言]
なごぬらうとてなごみちが千載のまねの跡をまごのぞく

上上吉 美事楼年久

秋夕 心ちのこころいれをささるるやうん
まごのこころいれをささるるやうん

[公言] 秋の目のうらぶみあつて静をうらんとてさる
人をあつみあつて静の静をうらとてさる

[公言] 四季の静をうらとてさるるあつてさるる
こころいれをささるるやうん

上上吉 柳水舎和幾住

草猪 桂のこころいれをささるるやうん
ねのこころいれをささるるやうん

[公言] 子夜をうらとてさるるあつてさるる
引てかゝる姫をうらとてさるるあつてさるる

上上吉 桂家凡

曉麻 しののめもかまの里の 曉えり
油のこころいれをささるるやうん

[公言] まごのこころいれをささるるやうん
あつてさるるあつてさるるあつてさるる

上上吉 浅津菴長記

あつてさるるあつてさるるあつてさるる
あつてさるるあつてさるるあつてさるる

上上吉

吉田 紫麦丸

持衣「榎の多い親里」ともひくくらくら

「よめ」 姑の中の 夜ま ぬい

「秋」 秋の野の松も 春の日の松の 根も

「春」 春の野の松も 春の日の松の 根も

「冬」 冬の野の松も 冬の日の松の 根も

「夏」 夏の野の松も 夏の日の松の 根も

上上吉

け道鶴時

「官人」 官人の十代の 十代の 十代の

「ぬ」 ぬのひりの ひりの ひりの

「秋」 秋の野の松も 秋の日の松の 根も

「春」 春の野の松も 春の日の松の 根も

上上吉

丁々亭多都岐

持衣「さ」 さのひりの ひりの ひりの

「秋」 秋の野の松も 秋の日の松の 根も

「春」 春の野の松も 春の日の松の 根も

上上吉

山々春風

春花「秋」 秋の野の松も 秋の日の松の 根も

「春」 春の野の松も 春の日の松の 根も

「冬」 冬の野の松も 冬の日の松の 根も

上上吉

喜佳園琢磨

枝梢「と」 とのひりの ひりの ひりの

「秋」 秋の野の松も 秋の日の松の 根も

「春」 春の野の松も 春の日の松の 根も

「冬」 冬の野の松も 冬の日の松の 根も

上上吉

筆の玉軸成

秋有「生」 生の野の松も 生の日の松の 根も

「長」 長月の野の松も 長月の日の松の 根も

買ひの中まつきまきよふ本動介がどろろい
かんのゆうれきとあめしうとまのし

上上吉

律巴阿計夷

伎卓

月 産取の奥ゆい人も待まてり
こよひの月子空ぬのしりまきよ

既取 奥のしりまきよひまきよとあめしう
結のあふたおあ結とらてまきよのしりまきよ
既取 奥のしりまきよひまきよとあめしう

上上吉

橘窓亭長細

尾列

廿月 産取のしりまきよ月ハ田舎の花角力
しりまきよしりまきよしりまきよ

既取 まきよしりまきよ月ハ田舎の花角力
てのただてはあめしうしりまきよしりまきよ
まきよしりまきよ

上上吉

花山連

ハ王子

麻 山の井のあめしりまきよしりまきよ
まきよしりまきよしりまきよ

既取 山中麻之ぬのお液井のあめしりまきよ
つるまきよしりまきよしりまきよ

上上吉

櫻花亭金丸

菊 山の井のあめしりまきよしりまきよ
まきよしりまきよしりまきよ

既取 粉揚粉地産取我翁子結の盛り成んての懐
旧のこめ三益のりまきよしりまきよ

上上吉

十分舎河丸

上取

月 産取のしりまきよしりまきよの月のしりまきよ
既取 産取のしりまきよしりまきよの月のしりまきよ
足せて産取のしりまきよしりまきよの月のしりまきよ
しりまきよしりまきよ

上上士

古今和奇丸

薄夜 産取のしりまきよしりまきよの月のしりまきよ
先取 産取のしりまきよしりまきよの月のしりまきよ

上上士

上世

以文堂為負

「月の母を月りちるは蜘蛛の巣へ
かゝるをちりてくまらる夕暮

上上士

亀玉堂齋包

「のやまき月の桂の花ぐさ
やまきよりの川よとぬれる

「うらまき及々ぬる桂のまきくわ
よのよと来てくる

上上士

海道近道

「えと見負むる世の中は月をり
わくはきててはかかろ大和の

上上士

望月約丸

「秋はあめと目みいさやうは尺付
丸のちとせり有りの桐のまき

上上士

黄金長丸

「天のちをちまのやうなまの夜へ
あふくはつづのこゝねぬ印
「あはれ三人も下のあはれい
むねまがたま

上上士

禁雪竹

「雪をちるん雪の中の下
凡文字よて海の「くね

上上士

醉水亭繩人

「枕より先くをちるくまの
月のこりりをこころ「くね

上上士

便面并常持

「無恥せし床をぬけて小夜
うまうつせまのめく衣も

「いづねたてて狂言のまがた
大でけく

上上士

三列吉田

豊橋元親

「夕暮ものけり秋のまき
くの遅ありの不於てま

上上士

下世

東本林近

「あまのあつちよ
あまのまきるの秋まきねも

上上士

下注

一軒舎門啓

ねまゝ「むすぶをありの隙の戸へ懸く
こゝろハ一作りあひのり

上上士

吉田

清水州主

麻

「鳴止くちりちりけさる麻ゆら
るゝひの星子そこのあけろの

「既五みる由大評判はまんざくくそ外の原
口ゆらくくすのやまゆら

上上吉

尋幽亭

月

「世々たまたまてたつをそもの智がわ
こゝろのむすぶこゝろの月 在月

「既五月の佳節を婿君として天候とあまは
つごころ相もたまたまの趣向をほげま
たてぬまのむすぶこゝろの作ま
ゆらまゝ「ひさかおのりも君がさるま
よるとあゝあるまゝのあけけんあまの
玉の上のそえこゝろの月の名あらうら

▲多々部

大上上吉

三番豊早人

「ももの門をときれ一時のたれ
むすぶこゝろのあはるはあし

「既五節を例の三番目の幕初をの目とま

「尾あつらゝのむすぶこゝろのあはるはあし

「あつらゝのむすぶこゝろのあはるはあし

「かえをむすぶ例のあはるはあし

「はけて向うむすぶあはるはあし

「さすかゝるむすぶあはるはあし

「てあつらゝのむすぶあはるはあし

「眼とらゝのむすぶあはるはあし

「子付がの鬼あはるはあし

「ど老人あはるはあし

「いゝびやうてもあはるはあし

あつていねい陽春目もあつての〜山あがり
巴人びんが〜
あつて住言もあつて大昔の大のびんあがり
大さか〜

至上上吉

紙屋川澄

昔「紙屋の藤」〜
か〜

既丸「善好法勝」〜
あつてあつて〜
よつてあつて〜
あつてあつて〜

上上吉

東夷菴古渡

昔「東夷菴」〜
あつてあつて〜

既丸「〜」〜
あつてあつて〜
あつてあつて〜
あつてあつて〜

上上吉

浅波菴河鳥

昔市「〜」〜
あつてあつて〜

既丸「〜」〜
あつてあつて〜
あつてあつて〜

上上吉

便々舎炭方

余表「〜」〜
あつてあつて〜
あつてあつて〜

中まのんくちのきんぎょがてかてかー

上上吉 坂下住

落葉「又ワセハ柳橋も落葉」

既見「その法印のおくさのち」 狂言「狂言とらわね」 狂言「狂言とらわね」 狂言「狂言とらわね」

上上吉 浅治楼見分

後見「おつとてい」 後見「おつとてい」 後見「おつとてい」

既見「お月の夜」 既見「お月の夜」 既見「お月の夜」

上上吉 便柳舎雪解

炭竈「カウ」 炭竈「カウ」 炭竈「カウ」

上上吉 桃花堂陽々

炭竈「炭の雲」 炭竈「炭の雲」 炭竈「炭の雲」

既見「お月の夜」 既見「お月の夜」 既見「お月の夜」

上上吉 万金亭多丸

既見「お月の夜」 既見「お月の夜」 既見「お月の夜」

上上吉 神楽堂友人

既見「お月の夜」 既見「お月の夜」 既見「お月の夜」

上上吉 大田水成

既見「お月の夜」 既見「お月の夜」 既見「お月の夜」

既見「お月の夜」 既見「お月の夜」 既見「お月の夜」

徳大寺もむらもぬ大寺すちの紅雲の足取が
ごぞもぞ

上上士

浅倉菴三笑

形をせ 紐して老も若も家のくほをせや
つとりのをせん 徳川 市川

既五つと趣のあまのりさぬまろく いろろ

春のあぢらわむ 既五形をせとまろくはあぢら
つらぬくまろく天てい

上上士

教訓亭文寄

梅翁 既五いこそ松のころをあげ巻の
あくまろくぎて笑のころと判

既五松のころわみむき松をいあがりころ世の
古文辞あり 慈童とあのことあけ巻をせ
冬まろくぎての白もよひぞく

上上士

月吉亭里住

香 既五ハ又春のけいもくことありのや
花もさくやのなるこの白をせ

上上士

柳盛俊

廣富 既五さきい里中くまをせ松の甲り
まをつめてやろく小世の炭くぬ

上上士

准調亭記丸

枯瓊 既五朝きあけけつる煙まの火をけりて
のまろく、松一く、松のあくろく

既五お三人とも二両子待りまを白をぬみよりのわ
のていさきまろくあぬ炭金やくまのまろく
いそをの雲ぬのつむもよくせられまろく

上上士

青葉亭竹丸

本枯 既五味かりハ松の山川よ声
うろくろくよあし松のまろく

上上士

宿乃志良字女

時香 既五いし時香古かろくくろくまろく
まろくよかへてあろく夕日くけり

上上士

四海雄丸九

香松 既五いよまろくのろく雲井のまろく
あくまろく入くろく五位まろくのまろく

既五こがりぬくろくわくまろくの飯時香を
の命やハ命ぬ香松ぬくろくまろくのぬくまろく
の飯まろくまろくしや評判でござら

八
國新
狂歌
愚
上
寄



つらき大どろくせし偽り坐れよ天体まを
手良のそびとあるおなごうおと想も及ぶぬほ
まの向がそまうまう

一巻之部

大上上吉

秋は冬より萩

奇獣意 「意病の業くひをを麻よりりも
あしちりししをさうふ

既五ねむじししきららけかか

からし一奇め 「たれまの體胎」

か 「まう」 春のしりあが 「の花は」

知事 「の返れ」

既 「たれ」

自使 「のあ」

あ 「ま」

ま 「あ」

尾列

至上上吉

角の内子

相見 「の思」

既 「心」

つ 「ね」

き 「よ」

と 「か」

改年

上上吉

翔麟雄

き 「田」

既 「大田」

あ 「い」

あ 「の」

尾列

上上吉

沼田あや女

あ 「の」

あ 「の」

三十一
[明] 送り舞の始はまきのなまのつては舞の
おろしきも三回のみよもよあそびのきなの
かりまゝ

上上吉 小玉音高

別名 [明] 小玉とあつては袖の花ちりり
羽衣の音高

[明] ひとけきあるまじいあつてはあつては
味入馬助のあつてはあつてはあつてはあつては
後のあをかりらるあつてはあつてはあつては

上上吉 桃原亭園丸

尾列 [明] 花舞もあつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつてはあつては

[明] やまと琴あつてはあつてはあつてはあつては
てのあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
まかたき

上上吉 東壁堂古文

尾列 [明] 口説きもあつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつてはあつては

おとねあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
があつてはあつてはあつてはあつてはあつては
りあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

上上吉 便々館湖鯉粉

[明] あまあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつてはあつては

[明] 中納言のあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

上上吉 浅花菴皮人

[明] ひつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

上上吉 浅春菴安良

下巻 [明] あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては
あつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつては

醫者ちくまきて娘の脈をきて医女おのつらぬ
おのれまきつて

上上吉

改阜

大矢員久

玉つさの書切をしてのつらまき
天と天を 和合 楽 せん
いしまあのおどいさちちお原直金のあつ
ちあつちまはなはれ合楽せんあつねよ
あつちつちまはな

上上吉

雲 晴安

おの 奴の ぬりまきつて
奴あぢぢち舞踊のまけ竹果をぬりてつて
つげまきまき一夜のあつちのぬりつて胸まき
うでまきまきまきまきまきまきまきまき

上上吉

尋遊舎友人

法網 ぬりまきつて
ぬりまきつてまきつてまきつて
上上吉 酒 養 人

お衣いままきつてちんちんまきつて
おんちんちんまきつてまきつてまきつて
おんちんちんまきつてまきつてまきつて
おんちんちんまきつてまきつてまきつて

上上吉

砧 音 成

思ひ肌あぢぢまきつてまきつて
まきつてまきつてまきつてまきつて
まきつてまきつてまきつてまきつて
まきつてまきつてまきつてまきつて

上上士

喜楽舎和孝

名 玉子のまきつてまきつて
まきつてまきつてまきつてまきつて
まきつてまきつてまきつてまきつて
まきつてまきつてまきつてまきつて

書 抄 九のや湖月

上上士

柳原向

まきつてまきつてまきつてまきつて
まきつてまきつてまきつてまきつて
まきつてまきつてまきつてまきつて
まきつてまきつてまきつてまきつて

上上士

尾列

沂水亭舞雩

「庭前のまろくろゆくとをいさよこして
おのろけをうり 伽馬ろをこくし

上上士

春風亭手弱柳

「夜くの袖まきられの氣つよくも
つよこたまさかぬーかぬのこくも

上上士 二人とも二雨子降し外はつもれもつちる
鳥の如件よろしくて大せみ

上上士

田中舎若齋

「枕つり杖み身をさめぬれしる ねまへ
髪よまろきこおもゆるし

上上士

甲路亭北住

「あめあつハ水まハせーみわーの山
あーくー一長のおよふをでりり

上上士

柏若葉

「葉やせー身を研そくハきりくごせ
そりまろくーのトよまろきこ

上上士

秋氏景報

「いろもん瘰をかじりみ ぞまてを
まろくろゆくとをささくぬくも

上上士

枕のたむとあいたちめめ熱いぬもあつちのど

上上士

「どうきつ死まき物をくくんと
せてりままハ 佐原さろくろ

上上士

唐羊莖高

「更々 月ふあつつききやんをーわまろ
まきまろ人の目まかろく

上上士

千歳堂核成

「まろくろーそよまろくろ
かろんひろくろをこが巻ろく

上上士

「庭まろくろあめま樹のまろの佐原の
あつち二雨子中お三人も妙まあつちの雨
ちやと大評判でござるぞまの口めく
ろくろのせま

上上士

大上吉

「いのしはまよ 血氣をうろく 肌うろく
ちがえまをまろくろ

上上士

春風亭若九

「あつちのちや方あつちのちや方
あつちのちや方あつちのちや方

上上士

「あつちのちや方あつちのちや方
あつちのちや方あつちのちや方

上上士

「あつちのちや方あつちのちや方
あつちのちや方あつちのちや方

上上士

「あつちのちや方あつちのちや方
あつちのちや方あつちのちや方

上上士

「あつちのちや方あつちのちや方
あつちのちや方あつちのちや方

上上士

「あつちのちや方あつちのちや方
あつちのちや方あつちのちや方

上上士

「あつちのちや方あつちのちや方
あつちのちや方あつちのちや方

上上士

「あつちのちや方あつちのちや方
あつちのちや方あつちのちや方

上上士

「あつちのちや方あつちのちや方
あつちのちや方あつちのちや方

上上士

「あつちのちや方あつちのちや方
あつちのちや方あつちのちや方

上上吉

通例舎安成

羨マのそよりまきよふ後んとまゝるるあは
まをむねあけの財をさそあま

既云なる借吉までむるがよりとづらふ
おまのかもの下は屋敷がふまひまて橋と松
子わたわらうををてまびつ志より汗まらり
ま〜〜あ〜〜

上上吉

明心舎竹細

様マつみみしち〜ぬえより山後ら
たや〜〜ようちむね〜なる

既云橋をまきて空やあるありおまの如
雨ゆるしのち家くマのきマは〜その音のや
ひ〜のきの〜借者おす〜

上上吉

紀上宿成

傾降マあ〜〜まう物ありとあ〜〜
松をまきよか〜まけいせい

既云のさのちりまひ〜新なるうよま
との〜せをひら〜を〜〜
うり物といひかり〜のせりふ見ゆか〜

上上吉

遠近堂雲峯高

初様マ〜〜つひぬ初の様ゆい 飛ぶゆの
お板の少もむねゆ〜

既云様人〜若根山の巻あ〜び〜
井邊をとり出を〜みのち〜
さ〜

上上吉

玉声亭形言

勢マ〜〜の〜ハ 似人への
耳よか〜〜の白〜

既云葉又許由の〜と耳よ〜がかん
ゆんと〜ま〜か〜ひ〜とま〜

上上士

醉美園三つふ

神祇マ〜〜もあ〜〜ま〜
ゆ〜の〜〜無〜

上上士

偃蓋亭種松

早春後マ〜〜春の〜代と〜
さきゆ〜君りゆ代を〜

既云 正同佐あるは正一なり詩〜外〜

左のくもづこがうらまのふぎやうあつた
黄傘とのれ上杖のやく目大敷うらみの出
まうらうとてすう一又かきわてを待たまをく

上上士

左右堂文云

懐曰「老ぬきい今を年をひとうづ
とうきくうううぬあう一をうき

上上士

尾列 後美雪堂元全豊

釈教「後の世かうのい念佛の字教とく
あうらう一かぬのうそ備守とて

既云「中の人ともあぢ形のちうちやうも

ごうらぬき糸の流ハロのうらうのせまう

まきく日考 蝶のぬ川のままごの教つてたぬ
ごうのまきの道の景えぞ久しき

